

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書

研究代表者 所属・職名 上越教育大学附属幼稚園 園長

氏 名 松村 恭子

研究期間 令和6年度～令和7年度

研究プロジェクトの名称	センター的な役割を担う国立附属園の在り方にかかわる研究 ～園同士の横の連携強化を行うしくみづくりを通して～
研究プロジェクトの概要	<p>本研究プロジェクトの目的は、上越地域の幼稚園・保育園・認定こども園が施設類型を超えた横の連携強化を図るためのしくみをつくる取組を通して、センター的な役割を担う国立附属園としての在り方について提言することである。</p> <p>令和6年度は、継続的な交流により、より質の高い保育のあり方や、それを支える保育者の援助について事例の整理を通して検討し、新たな見方や考え方にふれながら自園の保育の更新を行うとともに、園同士の横の連携強化を行うしくみを整えていく。</p> <p>令和7年度は、継続的な交流により整えてきた園同士の横の連携強化を行うしくみが、自園や他園の保育に与える影響について、省察やアンケート調査を基に検証していく。それとともに、センター的な役割を担う国立附属園の在り方について検討する。</p>
研究成果の概要	<p>令和6年度は、「オープンカンファレンス」「お出かけカンファレンス」「交流だより」の3つの交流の取組を核とした、園同士の横の連携強化を行うしくみを整えた。園同士の横の連携強化を行うしくみは、ハブの役割を担う交流、保育観の耕しにつながる交流、つながりをつくるよさを実感できる交流、持続可能な交流の4つの視点が全て重なり合うことによって機能していくことが示唆された。令和7年度は、園同士の横の連携強化を行うしくみによって、新たな見方や考え方にふれることで当たり前だと思われていたことが問い直され、自園の子どもの遊びの充実や育ちにつながっていることが示された。また、アンケート調査から、交流した他園においても、交流することが当たり前の問い直しや交流するよさの実感につながっていることも明らかになった。本園が2年間で作ってきたしくみは、「地域の中で、保育を問い直していくプロセスをともにつくっていくしくみ」として機能し、学び合うコミュニティの構築、発展に寄与するものであるといえる。</p> <p>これらのことを踏まえ、センター的な役割を担う国立附属園のあり方として、保育をする仲間として同じ地平に立ち、実践知をフラットにしていくこと、保育の質を高めながら、公立の園、私立の園と距離を縮め、時に共感的に、時に本音で言い合えるような関係をつくり続けていくことの重要性が示された。</p>
研究成果の発表状況 (※今後の予定も含む。)	令和6年度の成果は、令和6年9月に第32回幼児教育研究会を開催し、成果を発表した。令和7年3月には、研究冊子を発行した。令和7年度の成果は、令和7年9月に第33回幼児教育研究会を開催し、成果を発表した。令和8年3月には、研究冊子を発行した。2年間の研究のプロセスは、園のホームページにおいて、研究冊子のWeb版として公開予定である。
学校現場や授業への研究成果の還元について	本学の幼児教育セミナー、実地指導等において、講師または指導者として本園職員が参加し研究の成果を伝えた。令和6・7年の「オープンカンファレンス」には、県内外から計100名以上の参加依頼があり、研究の成果を還元した。令和8年度以降も、定期的に交流の取組を実施予定であり、研究の成果を還元していく予定である。

